

サンプル版
スケベゲーム 男魂継承

作者：金目

目次

製品版概要.....	2
第1話 健斗と亨 相互フェラ激励.....	3
第3話 第一ゲーム 団ケツボール運び より抜粋	14
奥付	21

製品版概要

各話タイトルとプレイ内容

- 第1話 健斗と亨 相互フェラ激励(相互フェラ)
- 第2話 着手金は漢気アナル2人前(アナル責め)
- 第3話 第一ゲーム 団ケツボール運び(全裸、ゴムによる玉責め)
- 第4話 襪の漢気玉責め(玉責め、失禁)
- 第5話 第二ゲーム 素股ザーメンファイト(相互素股)
- 第6話 第二罰ゲーム 手コキフィーバー(連続手コキ、連続射精)
- 第7話 太根魂のケツ○ン注入(ディルドアナニー)
- 最終話 相互ディルドで二人は永遠童貞・淫乱ケツマ○(ディルドによる疑似アナルセックス)

このサンプル版では、第1話全文と第3話の一部を掲載しています。

【お願い】

この小説は金目によるフィクションであり、現実存在する個人・団体などとは無関係です。

無断転載・私的利用の範囲を超えた共有などの著作権法に触れる行為、なりすまし・模倣を目的としたAI・機械学習への利用などは控えていただきますようお願いします。

この作品は犯罪行為を推奨するものではありません。

作中の性行為描写はすべてファンタジーとなります。現実のセックスへの参考になさらないようお願いします。

第1話 健斗と亨 相互フェラ激励

「亨、待ったか？」

「いや、今来たところだ」

太根大学サッカー部部長である健斗に声をかけられた亨は、首を振った。

亨と健斗は、早朝の自主練習日のサッカー部のロッカールームで待ち合わせをしていたのだ。

太根大学は、経営統廃合という世知辛い理由により、太平大学と根岸大学の2つの大学が合併して誕生したばかりの大学だ。

そのため、このサッカー部には占有できるグラウンドがなく、他の運動部とスケジュールを組んで融通し合っている。

自主練習日とは、グラウンドを利用できない日のことでもあり、サッカー部員たちも早朝からやってくることは、ほぼない。

「話は……派閥問題だよな」

「……ああ」

健斗が困った顔で告げたことに、亨はほろ苦い思いで頷いた。

大学合併前まで、亨にとって健斗とはライバル校のエースであった。

4年生になったら、互いに太平大学と根岸大学のサッカー部部長となり、雌雄を決するのだと信じて、練習に励んできた。

その思いは、健斗も同じだろう。

だが、経営統廃合という世知辛い理由による合併が2年前に発表され、今年度、健斗と亨は同じチームとなった。

合併したからといって、すぐに一つのチームとしてまとまれるわけがなく、旧太平大学の部員と旧根岸大学の部員の間には溝があった。

亨もまた、健斗や旧太平大学の部員への接し方が分からず、溝を埋めることができなかった。

そうした窮屈な空気を打破したのが、太根大学サッカー部の監督に就任した椎名勝平が提唱したスケベゲームであった。

亨と健斗は、スケベゲームにおいて心身を羞恥に震わせながらも互いを信頼し、弱みを曝け出し続けることで、太根大学サッカー部を一つのチームとしてまとめることができた。

……そのはずであった。

「まさか、卒業を控えた今になって、派閥問題が再燃するとはなあ……」

陽気で明るいラテン系の顔立ちの健斗が、心底困ったという様子でぼやいた。

「ああ……」

亨も、困った顔をして頷いた。

太根大学サッカー部の部員たちがギクシャクするようになった発端を亨も、健斗も把握している。

とあるサッカー系のまとめサイトにて、「太根大学サッカー部の主流派は旧根岸大学」という記事が出たのだ。

内容は、旧根岸大学のサッカー部員がレギュラーを多く占めることや、次期サッカー部部長が亨の後輩であり、ゴールキーパーとして指導をしてきた直秀である、というものだ。

もちろん、事実無根である。

そのまとめ記事が出た時点で、亨も、健斗も、椎名監督も、次期部長については相談をしていなかった。

亨自身、直秀を次期部長に推薦するかどうかを、旧根岸大学の柵も考慮した上で悩んでいるところであった。

レギュラーの比率についても、旧根岸大学が多くを占めているという事実はない。

そんな事実無根のまとめ記事が、何をどうしたのか、太根大学サッカー部の周囲で認知され始めてしまった。

そして、旧太平大学関係者や旧根岸大学関係者が、無責任にその噂について太根大学サッカー部にあれこれと注文をつけてきたため、太根大学サッカー部としてまとまっていたはずの部員たちも、旧属を意識し、ギクシャクするようになってしまったのだ。

「とはいえ、もう卒業するから知らないっていう訳にはいかないよな」

「……ああ」

健斗のぼやきに、亨は深く頷いた。

実を言えば、亨はもう解決策を用意している。

太根大学サッカー部部長である健斗に内々に解決策を示すために、亨は健斗を呼び出したのだ。

「おっと、その先は言うなよ」

だが、亨が口を開くより先に、健斗の掌が亨の口の前で広げられた。

「お前のことだ。」

旧属の象徴である俺か、お前のうち、どっちかが退けば派閥問題が解決するとか考えただろ？

なんなら、まとめサイトで名前を上げられたのは直秀だもんな」

健斗の指摘に、亨は拳を握った。

健斗の指摘通り、亨は、太根大学サッカー部を退部することで、再燃しかねない派閥問題を収めようとしている。

亨が退部することにより、旧根岸大学サッカー部員たちにもう一度、省みる機会を与えたかったのと、ゴールキーパーとして指導をしてきた直秀の立つ瀬を残したかったのだ。

旧太平大学サッカー部員も、亨が退部をしたうえで直秀にもケジメを求めることはないだろう。

亨は、そのように考えたのだ。

「だったら——」

「お前まであの記事に引っ張られてどうするんだよ」

亨の決意を遮るように、健斗が指摘を重ねた。

「俺たちは、もう、太根大学サッカー部なんだ。」

部員たちの範となるべき俺たちは、そのことをもう一度、皆にきちんと示すべきだ。

旧根岸大学だから、なんて理由で勝手に自己完結するなよ。

俺たちは、同じ、太根大学サッカー部だ。

一つの、チームなんだ」

健斗の言葉に、亨はハッとした。

確かに、健斗の言う通りだ。

亨は、旧根岸大学サッカー部として、再燃しつつある派閥問題への対処を考えてきた。

けれど、旧根岸大学サッカー部としてケジメをつける、という亨の発想こそが、派閥問題を肯定することになってしまう。

一つのチームとしての、太根大学サッカー部としての正しい解決ではない。

けれど……

「では、健斗、お前は何か代案があるのか？」

「もちろん」

亨の問いかけに、健斗が頷いた。

「もう一度、スケベゲームをすればいいのさ」

健斗の言葉に、亨は二重に驚いた。

かつて、旧属による派閥問題を解決したスケベゲームを考慮していなかったという驚きのあとに、健斗がスケベゲームを提案したことに驚いたのだ。

スケベゲームの最中、ケツを責められた健斗は、苦悶し、泣き言を吐露していた。

スケベゲームを開催するとなれば、健斗もまた、耐えがたいケツ責めを受けることになる。

ケツモロ感である亨と違い、あんなに苦悶していた健斗が、自発的にスケベゲームを発案したことが、亨には信じられなかったのだ。

「もちろん、俺たちの自主性によって、だ。

太根大学サッカー部発足から 1 年を迎えようってのに、チームワークで椎名監督を煩わせるなんて、部長と副部長として、情けないじゃないか。

だから、卒業前に、太根大学サッカー部の部長と副部長として、俺たちの手で、今度こそ、派閥問題を終わらせようぜ」

驚き、言葉を失った亨の前で、健斗が男らしく、堂々と宣言をした。

亨は、ライバルだとばかり思っていた健斗の器の大きさに圧倒された。

太根大学サッカー部としての解決の仕方を思いつけなかった亨自身を情けなく思う。

それから……

「だが、健斗、いいのか？」

お前は、その……ケツを責められるのは辛いだろうに」

亨は、健斗に問いかけた。

スケベゲームよってケツを責められ、己がケツモロ感であると暴かれた亨は、スケベゲームという場に限れば、ケツを責められてもいい、と思っている。

アナニーをする気はないが、場の雰囲気流されてケツを責められて射精させられるこ

とについて、羞恥こそあれど、嫌悪はしていない。

アナニーさえしなければ、亨の男らしさが損なわれたわけではない、と亨は考えているのだ。

けれど、ケツを責められても悪い気はしない、というのは亨だけの事情だ。

健斗は、ケツで気持ちよくなるのが難しいようで、苦悶の声を上げていた。

大丈夫なのか、と亨が心配し、確認をするのも当然だろう。

「……まあ、嫌だけどさあ、本音を言えば。

ぜんっぜん、気持ちよくねーし、ケツの中が気持ち悪いだけだし。

サッカー部の連中だって、俺が善がった方がもっと盛り上がれるだろうに、情けねえっただらねえわ」

健斗が語るケツ責めへの感想は、亨の想像とほぼ重なっていた。

亨にとって予想外だったのは、ケツで感じられないことに対する健斗の思いであった。

健斗のノリと勢いを重視する陽気さを亨は理解しているつもりであった。

だが、まさか、スケベゲームでの盛り上がりという点で、ケツで感じられないことを悔しがるとは、思わなかったのだ。

「けど、男子たる者、義のため、ダチのためならば、ケツの二つや三つ、差し出せなきゃ駄目だろ？」

大仰な言い回しではあるものの、健斗の目には意志の強さが現れていた。

その眼差しを直視した亨は、健斗が本気なのだ、と悟った。

感じられないケツ責めによる苦悶を飲み込む覚悟で、スケベゲームを提案していると、亨は実感した。

「……ケツが二つも三つもあってたまるか」

それはそれとして亨は、健斗の軽口にツッコミを入れた。

「へへへ、いつもの調子が出てきたじゃん」

健斗が笑みを浮かべ、亨の肩を叩いた。

健斗の陽気さを見ていると、健斗をライバルだと思っていたのは間違いではないか、と感じてしまう。

「……お前は凄いな、健斗」

亨が、感嘆を言葉にすると、健斗が首を傾げた。

「いや、お前だって凄いな」

健斗が、当たり前のことのように、亨をまっすぐ見つめて言い切った。

「亨は、その存在感っつーか、不動振りがいいんだよ。

ゴールキーパーとして背中を預けられるし、練習試合で対峙すると、顔色一つ変えずにシユートを防ぎ続けるお前は難敵だ。

お前の堅実な生き方があるからこそ、旧根岸大学サッカー部への懐古も続くんだろうな。

お前はお前で、立派にやってきたんだ」

健斗の言葉に、亨は耳を疑った。

亨と健斗は、互いの印象を語り合ったことなどない。

まさか、20 歳を過ぎ、社会人を目前に控えたこの時期に、青春ドラマじみた状況が己に

起きるとは思わなかったのだ。

「あ、亨、お前、信じてないだろ」

健斗がジト目で亨を見つめる。

「いや……その……」

亨は、青春ドラマじみた現状を信じられず、しどろもどろになった。

「はあああ……」

亨の反応に、健斗が大きな溜息をついた。

健斗の溜息を聞いた亨は、二人の認識の差異に気がついた。

亨は、青春ドラマのような今の状況に戸惑い、信じられない思いを抱いている。

けれど健斗は、亨が健斗の称賛を信じていない、と誤解をしているのだ。

亨は、健斗の誤解を解こうと弁明を發しようとした。

「俺は、お前のチンポなら生フェラしてやってもいいぐらい買ってるんだぞ。

サッカー部の連中なら見抜きまでだけど、ダチでライバルのお前なら、そこまでしてやるってことだ」

「は？」

健斗の言葉に、亨は今度こそ、健斗を信じられなくなった。

スケベゲームにおいて、亨も健斗も、互いのチンポをフェラチオしたことがある。

けれどそれは、コンドームを装着した上でのフェラチオだ。

生でフェラチオをしたことはない。

いや、そもそも、童貞であるとはいえ、亨はノンケだ。

健斗もノンケのはずだ、たぶん……

それに、ゴムチンポフェラチオを提示された際、健斗もフェラチオを嫌がっていたはずだ……

「なんだよ、その面？」

そりゃまあ、誰彼構わずってのはやらねーけどよ。

お前は俺が認めるライバルで立派な漢なんだから、それぐらい当たり前だろ？

2回目のスケベゲームでされてみて分かったけどよ、フェラチオってすげー気持ちいいじゃん。

あんときは俺、イかせてもらえなかったけど」

「それはまあ……」

健斗のあっけらかんとした言葉に、亨はフェラチオの気持ちよさについて同意を示した。

その一方で、男である健斗が、亨のチンポをフェラチオしてもいいと言い出したことに、亨は感情が追いつかない。

「まあ、フェラチオすげー気持ちよかったから、またされてみたかったんだけどさ。

どうせなら、こう、身体を差し出しても構わないぐらい信頼できる奴とシックスナインしてえじゃん。

実を言うとき、俺、いつシックスナインの誘を出そうか、ずっと機会を伺ってたのさ」

好奇心と劣情が混ざり合い、淫猥な目つきをした健斗に見つめられ、亨はドキドキしてきた。

スケベゲームにおける健斗のフェラチオを思い出した亨のジャージが盛り上がっていく。

「へへ、勃起してきたじゃん。

やろうぜ、シックスナイン」

健斗があっけらかんと笑い、当たり前のようにジャージを脱ぎ始めた。

しなやかな筋肉と浅黒い肌をした、俊敏さを備えた裸体を惜しげもなく露わにした健斗に、亨は動揺する。

「いや、ちょっと待て。

ここで、するのか」

己の声を耳にしてから、亨は、この返答ではシックスナイン自体を受け入れているようではないか、と考えた。

「ああそっか。

他の連中に見せたら有難みが薄れるもんな。

じゃあ、シャワーブースで……相互フェラにするか。

シャワーブースなのでシックスナインは狭いもんな」

健斗は、自己完結をしたようで、脱いだジャージと白ブリーフを適当にロッカーに詰め込み、仮性包茎デカチンをぶらぶらさせながらシャワーブースへと歩いていく。

その背中を見ながら、亨は自問自答する。

健斗の提案を受け入れ、相互フェラチオをするべきか、どうかを……

少しだけ考え、亨はその場でジャージを脱ぎ始めた。

健斗によるフェラチオを思い出し、亨は勃起している。

それが答えだ……

現実逃避に性欲を優先したのか、それとも健斗が示した親愛への返礼なのか。

亨は相互フェラを受け入れる己の心を棚上げにし、健斗を追いかけて全裸でシャワーブースに向かった。

狭いシャワーブースの中で、亨は健斗の裸体をマジマジと見た。

浅黒い肌の下で息づくしなやかな筋肉は、フィールドでの俊敏さとシュートの鋭さを連想させる。

股間には、立派な仮性包茎デカチンがぶら下がっている。

ずる剥けとはいえ、平凡なチンポでしかない亨に比べて、健斗の堂々とした男らしい裸体を、亨は羨ましく思う。

亨は大柄な体格をしており、ゴールキーパーとしては有利だ。

その一方で、大柄な体格との対比でチンポが小さく見えてしまうことを、亨は恥ずかしく思っている。

数値の上では平均的だと分かっているけど、健斗のようにデカチン！ と分かりやすいデカチンを前にすると、コンプレックスを刺激されてしまう。

「へへへ、じゃあ、俺から行くぞ」

健斗は能天気宣言すると、亨の前にしゃがみこんだ。

そして、亨の腰に両手で縋りつき、亨の勃起チンポを口の中に迎え入れた。

「うううう……」

亨は、喘ぎ声を漏らさぬよう、歯を食いしばった。

健斗のフェラチオは、とても上手だ。

ゴムフェラシックスナインの際、亨は翻弄され、イカされてしまった。

今回は、コンドームを用いない生フェラのせいかな、亨はしゃぶられただけで下腹部が暴発しそうになった。

生チンポを包み込む頬肉の柔らかさや、舌の淫猥さ、唇の環で優しく扱かれる心地よさ。

同じ男だから感じる場所が分かるのか、健斗のフェラチオはかなりヤバイ。

「やべえ……」

亨は、いやらしい熱を言葉にして放出した。

「へへ、そりゃそうだろう」

亨の勃起チンポから口を放した健斗が、亨を見上げてニヤッと笑っている。

健斗の得意げな笑みを見下ろした亨は、健斗のデカチンが萎えていることに気がついた。

「萎えてるじゃないか」

亨が指摘をすると、健斗が笑った。

「別に俺、チンポをしゃぶって善がる趣味はねえもん。

俺のチンポを勃起させるのは亨の仕事だ」

健斗に挑発的な表情をされ、亨はむっとした。

誤解かもしれないが、健斗に「お前がフェラチオ下手でも許すぜ」と上から目線で言われたように感じたのだ。

亨は、絶対に思い知らせてやると決意する。

そして、歯を食いしばりながら、フェラチオに戻った健斗をじっと観察し始めた。

健斗がもたらす快感ではなく、健斗がどこをどうしゃぶっているのかを、亨は快感に震えながら必死に感じる。

健斗は、亨のずる剥け亀頭に舌を這わせない。

唾をたっぷりと含み、頬肉や唇の柔らかさで包み込み、緩やかに愛撫している。

と思えば、健斗の舌先が亨の裏筋をチロチロと小刻みに舐めている。

雁首に健斗の舌先が触れた亨は、強い刺激に肩を震わせた。

そして、理解した。

健斗は、亀頭や雁首など、特に敏感な部位への舌愛撫は慎重に行っている。

時々、快感のスパイスとしてわざと雁首をチロツと舐めているが、刺激で追い詰めるような舐め方はしていない。

健斗は舌を使うのは、亨の勃起チンポを喉奥まで迎え入れた際に、陰茎に絡ませることが多い。

喉奥まで迎え入れられ、陰茎に舌を絡められて、亨は、健斗に奉仕されている、と強く感じた。

健斗が亨の腰に縋りついているように、健斗の舌が亨の陰茎に縋りつき、執着をしているようだ。

健斗も童貞のはずなのに、こんなにも亨の雄性を刺激し、フェラチオの悦びを育んでいる。

この技巧をすべて習得することは無理でも、要領ぐらいは覚えなければ……

亨は、快楽にかき乱されながらも、必死に健斗のフェラチオテクを覚えようとする。

ビン！

「あう！」

金玉へのちょっとした衝撃に、亨は短い悲鳴を発した。

金玉を指で弾かれたのだ、と理解すると同時に、健斗の手が亨の金玉を揉み始め、健斗のフェラチオが陰茎に対する前後運動を激しくさせた。

健斗は、唾の量を増やすように口を動かしているようで、健斗の口からジュボジュボとエロ漫画の擬音のような水音が聞こえてくる。

「ちょ！ イっちまうだろ！」

亨は、健斗の口の中に射精したくない一心で叫んだ。

健斗のフェラチオが気持ちいいのは間違いないが、それでも、健斗の口を亨のザーメンで汚したくはなかった。

だが……

「うううううおおおおおおおお」

気がつけば亨は、健斗の頭を掴み、腰を振っていた。

駄目だ、と思いながらも、亨は健斗の頭を掴んだまま、腰を振り続ける。

「イっくうう！」

亨は短く叫び、健斗の口の奥に向かって勃起チンポをぶち込んだ。

亨は、勃起チンポが爆発するかと思った。

爆発という言葉以外に、全身に広がった喜びを表現できなかったのだ。

童貞で、しかもザーメンをぶっ放した相手は男で、ライバルで、尊敬できる相手だというのに、亨は、己の雄性を強く強く、確かなものとして実感した。

亨の分厚い腹筋が大きく収縮を繰り返している。

獣のような呼吸音を耳にした亨は、その呼吸が己のものであると分かるまで時間がかかった。

亨は、ぶるりと身体を震わせた。

「ああ……」

素晴らしい射精の余韻に、亨は爛れた息を吐いた。

それから亨は、健斗の頭を掴んだままであることに気がついた。

「す、すまん！」

亨は慌てて健斗の頭から手を放した。

健斗は、ゆっくりと亨のチンポを口から抜いていく。

健斗の口の端からどろどろと、唾液とザーメンが混じった白濁が零れている。

健斗が、亨のチンポから口を放し、口を大きく開けた。

健斗の舌には、亨のザーメンがたっぷりと残っていた。

「いっはいはひはは」

健斗の言葉は間違いなく、「いっぱい出したな」ということだろう。

健斗は両手をお椀型に合わせ、そこに向かって顔を傾けた。

「げえほっ！ げほっ！」

健斗が咳き込み、ザーメンを掌に吐き出していく。

「ははっ、いっぱい出したな、亨。」

見てみろよ、掌にこんなに出了ぞ」

健斗が勝ち誇ったように、掌を亨に差し出した。

健斗の言う通り、亨の掌にはたつぷりとザーメンが零れている。

「あ、シャワーを回してくれよ。

流石に、このまま蛇口を回したくないし」

「お、おう」

健斗に求められ、亨は慌てて健斗の側にあるシャワーの蛇口を捻った。

「サンキュな」

礼を伝えた健斗が、掌を洗い、シャワーのお湯で口を漱ぎ始めた。

亨は、頭がふわふわしてきた。

健斗が、亨のチンポをフェラチオしたことも、健斗のフェラチオが気持ちよかったことも、まるで、夢のように現実感がないのだ。

気持ちよかったことは確かなのに、射精と共に現実感まで抜け落ちたように、快感以外の一切がぼんやりと霞がかかったようなのだ。

亨は、ぼんやりと霞がかかったようなシャワーブースの中で、鮮烈な色を放つ健斗の裸体を見つめる。

俊敏さとしなやかさ、そして、鋭いシュートを放つ瞬発力を備えた裸体は、健康美の一つの形のはずだ。

小さく引き締まったケツも、長時間の疾走に耐えうる脚部も、うがいのお供、分かりやすいほどに、男の身体だ。

健斗は男で、亨も男だ。

スケベゲームでも開けっぴろげな健斗ではあったが、チンポをしゃぶるほどに性行為に飢えているのだろうか？

いや、それはあり得ない。

健斗の陽気さやラテン系の顔立ちは、大学の内外で人気がある。

わざわざ、男を、それもガチガチにガタイのよい亨のチンポをしゃぶる理由なんて、あるのだろうか？

……しゃぶってみれば、分かるかもしれない。

亨はそう思い至った。

健斗が亨を特別な男と認めてフェラチオをしたのなら、同じように健斗にフェラチオをすれば、健斗の考えを理解できるかもしれない。

「健斗、俺の番だ」

亨は、健斗に声をかけ、振り返った健斗の腰に縋りつくようにしゃがみ込んだ。

健斗の仮性包茎デカチンは、亀頭が包皮で覆われているせいか、しゃぶれそうだと亨は思った。

亨はそのまま、健斗の仮性包茎デカチンを半分ほど口の中に含む。

含んでみて、亨はチンポの臭さに気がついた。

ションベンの臭い、亀頭の臭い、それからザーメンの臭い。

いや、ザーメンの臭いは錯覚かもしれない。

とにかく、男から連想される臭さが健斗のチンポから亨の口の中に広がっている。

不快な臭いのはずだ。

亨は、健斗の包茎デカチンについて「臭い」と感じているのだから。

けれど亨は、健斗への友情が厚くなるのを感じた。

健斗は、こんなにも臭いものをしゃぶったのだ。

同等のものを返せなければ、亨は健斗の友ではいられない。

亨は、健斗に施されたフェラチオを思い出しながら必死に健斗の包茎デカチンに奉仕をする。

健斗が亨の口の中で反応していく様子を、舌や頬肉の内側で感じたとき、亨はホッとした。

健斗が亨のフェラチオに反応していることで、健斗と並び立てると安堵できたのだ。

このまま、健斗にフェラチオを返したい。

健斗が示した友情に相応しい快感を与えたい。

亨は、健斗のフェラチオを脳内で反芻しながら頬肉を、舌を、唇を動かす。

健斗の手で頭を掴まれたとき、亨は健斗が悦んでいることを実感した。

健斗の腰が動き、亨は健斗の包茎デカチンから口を放さぬよう、必死に縋りつく。

健斗のようにやりたい。

健斗のようにフェラチオをしたい。

健斗に負けたくない。

亨は、一心不乱に唇を、舌を、頬肉を蠢動させ、健斗にフェラチオを施す。

亨の頭を掴む健斗の指先の圧が強まる。

亨は、健斗のザーメンを受け入れる覚悟を固める。

「イっくうううさいっこおおおおおおおおおおおおお！」

歓喜の声と共に、健斗の包茎デカチンから弾けるようにザーメンがぶっ放された。

シャワー温水でのうがいを終えた亨は、健斗に振り返った。

健斗はシャワールームの壁に寄っかかったまま、笑っている。

「すっきりしただろ？」

健斗の笑みに、亨は頷いた。

射精の快感は、ストレス解消効果と同時に、理性を刺激する効果があると誰かが言っていたのを、亨は思い出したのだ。

「別に手コキでもよかったんじゃないか？」

亨の指摘に、健斗が首を振った。

「それじゃお前、俺に負けたって勝手に思ったままウジウジ手コキするじゃん」

健斗の返答に、亨は言葉に詰まった。

確かに、相互フェラに至るまで、亨は今回の騒動の責任を旧根岸大学サッカー部として背負わなければならない、と思い込んでいた。

健斗のペースに流され、相互フェラをしている間にすっかり忘れてしまった。

「さっきも言った通り、お前は俺にとって大切なダチで、ライバルで、太根大学サッカー部

の仲間だ。

フェラチオしてやってもいいってのは誇張じゃない。

お前は別格なんだよ、俺にとって」

健斗の言葉に、亨は苦笑いを浮かべた。

それと同時に、ある可能性に気がついた。

「一人でフェラはできないから、俺を巻き込んだんじゃないのか？」

「それもある。

やっぱ、手コキよりフェラ射精の方が気持ちいいし。

しゃぶられたい奴は、先にしゃぶるしかねえのさ」

「この野郎」

悪びれた様子もなく、フェラの快感も目的だったと明かす健斗に、亨は悪態をついた。

「なんなら、スケベゲームで一緒に喘がされて恥ずかしい目に遭わされてもいいぞ」

「……ああ、そうだな」

そういえば、スケベゲームの開催も話題の一つだった、と亨は思い出し、頷いた。

スケベゲームによってもう一度太根大学サッカー部の団結を取り戻すと聞かされたとき、
亨は健斗の心配をした。

けれど今なら、その心配は余計なことであったと亨は分かる。

健斗は、そこまでの覚悟を固めた上で、亨に提案をしたのだ。

そして、亨への友情の特別さを示す意味も含めての相互フェラだったのだ。

「お前となら、次のスケベゲームも乗り越えられるよ、健斗」

「じゃあ、次の問題を考えようぜ」

健斗が腰に手を当てたまま、胸を張って告げた。

「スケベゲームの司会進行、それと罰ゲームの用意を誰に頼むか、だな」

「そうそう。

ザーメンぶっ放して頭が回ってきたじゃん」

健斗の返答に、亨は顔をしかめた。

「その言い方だと、俺が四六時中オナ猿のようだ」

ザーメンをぶっ放したことで頭の回転がスムーズになったという言い方は、頭のギアに
ザーメンが絡んでいるようだ、と亨はツッコんでやる。

最も、亨は朝勃ちを鎮めるため、そして、練習後の熱を冷ますため、と一日2回のオナニ
ーを習慣としている。

亨自身の認識はともかく、十分にオナ猿だろう。

「これからはフェラ猿だな」

「上手いことを言ったつもりか」

健斗の軽口に応じながら、亨は、ある学生を連想した。

健斗がスケベゲームの開催を提案したとき、「発足1年も経つのに、結束で監督を煩わせるのは情けない」という発言をしていた。

そうなると、サッカー部の部員たちで今回のスケベゲームを完結させなければならない。

スケベゲームの司会進行や罰ゲームの用意を依頼するのにふさわしいサッカー部員を、
亨は、彼の他に思いつかない。

旧太平大学でも、旧根岸大学でもないことに加え、1年生でありながら先輩についていくように派閥に加わらなかった変わり者のマネージャー。

孤高を気取っているわけではなく、コミュニケーション能力もあるのに、のりくらしと独自の立ち位置で太根サッカー部の中で役目を果たしている風変りなマネージャー。

そして、椎名監督の指示に従い、過去のスケベゲームの補助の経験がある1年生。

「箕輪に頼むんだな」

「箕輪に頼もうぜ」

亨と健斗は、同じ学生の名を挙げた。

太根大学サッカー部のマネージャーにして、派閥のあれこれを上手に回避していた変わり者。

黙々とマネージャーの業務をこなすだけかと思いきや、椎名監督の指示に従いスケベゲームの補助もこなした箕輪勇樹ならば、任せられる。

勇樹の名を口にした亨は、健斗が罰ゲームで勇樹に射精管理されていたことを思い出した。

その頃、亨は実家のゴタゴタで太根大学を離れていたため、健斗が射精管理されている様子については又聞きでしか知らないが……かなりノリノリだったらしい。

……もしかして健斗は、陽気なのではなく、開けっぴろげなのでもなく、恥ずかしい姿を見られることが癖になってきているのだろうか？

亨は、その疑問を胸の奥に丁重にしまった。

流石に、健斗の性癖を追及するのは、友情の範囲外のような気がしたのだ。

今は、再燃しかけている太根大学サッカー部の派閥問題の鎮火に専念しよう。

「大丈夫だって。

俺たちなら絶対、今度のスケベゲームも上手く行くさ」

健斗が亨を励ますように肩を叩いてきた。

流石に、「健斗の性癖を心配していた」とはいえず、亨は頷くことしかできなかった。

第3話 第一ゲーム 団ケツボール運び より抜粋

太根大学サッカー部のミーティングルームに集ったサッカー部員たちは、どこことなく気まずそうな顔をしている。

サッカー部部長である健斗と、副部長である亨の連名により、本来、休部日である今日、招集をされたことに、居心地の悪さを感じているのだろう。

集まったサッカー部員たちは、雑談をすることもなく、沈黙を守っている。

サッカー部員たちは、健斗と亨の招集の目的を察している。

「太根大学サッカー部の主流派は、旧根岸大学サッカー部」という事実無根のまとめ記事が拡散し、周囲からあれこれと言われ続けていることで太根大学サッカー部としての団結

が乱れていることへの、何らかの訓戒だろう。

サッカー部員たちは、今のままではよくないことを自覚している。

けれど、どうすればよいのかを、誰も分かっていない。

太根大学サッカー部の誰かが「太根大学サッカー部の主流派は、旧根岸大学サッカー部」と言い出したのならば、注意をするなりして、改めればよい。

だが、今回は外から持ち込まれた事実無根の風聞だ。

だというのに、なぜか太根大学ではこの事実無根の風聞が広く拡散してしまっている。

頭では「くだらない噂」だと判断できても、心ではそうはいかない。

太根大学サッカー部の誰かが、今回のまとめ記事の現況ではないか？

あるいは、太根大学サッカー部の誰かが、わざとこのまとめ記事を拡散したのではないか？

健斗と亨が身体を張ったスケベゲームの団結を軽蔑している誰かがいるのではないか？

太平大学と根岸大学の合併に納得していない誰かがいるのではないか？

小さな疑念がささくれのように刻まれ、そうした疑念がチームプレイへのぎこちなさにつながる。

チームプレイに乱れが出れば、太根大学サッカー部としての団結が揺らいでいる、と感じてしまう。

その原因を想像すればするほど、プレイに身が入らず、チームプレイに乱れが出る。

悪循環だと、サッカー部の誰もが分かっていても、止められない。

サッカー部員たちは、健斗と亨がどんな叱責をするのかを待つしかなかった。

「へへへ、緊張してきた」

ミーティングルームに集まったサッカー部員たちの様子を隣室から伺いながら、健斗が肩を震わせた。

「……俺もだ」

亨は、健斗のぼやきに共感を示した。

サッカー部員たちの居た堪れない顔を見たことで、亨は、旧太平大学と旧根岸大学の溝を改めて自覚する。

亨は、サッカー部員たちもまた、今の状況を良くないと思いながらも、どうすればよいのかが分からないのだ、と改めて認識する。

かつて、ライバル校として切磋琢磨してきた旧太平大学と旧根岸大学。

その自負を、太根大学サッカー部の1年にも満たない日々で上書きすることなど、無理があったのだ。

「俺らは、今回の危機を乗り越えることだけ、考えようぜ」

亨の心を読んだかのように、健斗が呟いた。

「今回の？」

亨は、健斗に問いかけた。

健斗が、真剣な顔で亨を見上げた。

「ああ、今回だけだ。

やっぱ、太平大学と根岸大学の日々を、そう簡単に忘れられないよな。

だから、俺らが卒業したあともきつと、似たようなことが起きる。

けど、その先は次の年の太根大学サッカー部の問題なんだよ」

「……それもそうだな」

健斗の言葉を聞いた亨は、気が楽になった。

亨は、健斗と共に今回の問題を乗り越えればよい。

たったそれだけならば、今回のスケベゲームで乗り越えられる、

亨は、そう感じたのだ。

「皆さん、これから健斗部長と亨副部長が来室します！」

スケベゲームの司会進行を引き受けた勇樹の声を耳にした亨は背筋を伸ばした。

亨と健斗にとって、今回が最後のスケベゲームだ。

最後だからこそ、堂々と入場したい。

その先に待つものが、勇樹の用意した恥辱と快楽だとしても、亨は男らしく受け止める覚悟ができています。

……何より……

亨は唾を飲み込み、腰を軽く撫でた。

勇樹に辱められれば、もっと鮮烈な快感を暴かれる。

そんな予感に亨のケツの奥が疼いたのだ。

「んじゃ、行こうぜ」

「ああ」

健斗に肩を叩かれた亨は、部員たちが集合しているミーティングルームに、ともに入った。

「皆、分かっていると思うが、ここのところ、俺たちは太根大学サッカー部としての連携が乱れている。

このままではよくないことも、分かっているはずだ」

サッカー部員たちが居た堪れなさそうにしているのを見つめながら、亨は言葉を紡いだ。

亨は、サッカー部員たちの様子を見て、まだ希望がある、と感じた。

もしもここで、サッカー部員の誰かの顔に不満や反発が見えていたのならば、今回のまとめ記事の犯人捜しを試みる猜疑心が芽生えていることになる。

けれど、サッカー部員たちは気まずさへの反省こそあれど、犯人捜しを試みようとはしていない。

これならば、団結を取り戻すことも叶うだろう、と亨は感じたのだ。

「俺たちはもう一度、太根大学サッカー部としての団結を思い出す必要がある。

その切っ掛けとなったスケベゲームを、これから開催するぞ！

今回の司会進行は、俺と亨の勝手に、マネージャーの箕輪勇樹に一任した。

んじゃ、勇樹、皆に挨拶してくれ」

健斗の言葉に、サッカー部員たちが顔を上げ、互いと顔を見合わせた。

サッカー部員たちの表情には、驚きと僅かな期待が見えている。

亨は、亨と健斗の羞恥や喘ぎ、悶絶に需要があることに複雑な思いがした。

健斗ほど開けっ広げな気質ではない亨は、太根大学サッカー部のためとはいえ、恥ずかしい思いをすることは、できる限り、いや、なるべく避けたい。

その一方で、亨や健斗の羞恥や喘ぎによって団結を取り戻せるのならば安いものだという考えもまる。

また、今回のスケベゲームの後に待つ御褒美……いや、勇樹への労いとして求められている、健斗との相互ディルド責めへの思いもある。

あえて単純化するのならば、恥と使命感と期待が混じっているのだ。

「健斗部長と亨副部長からの依頼を受け、今回のスケベゲームの司会進行を務める箕輪勇樹です。

健斗部長と亨副部長が、色々と、そう、色々と、あれこれと、頑張る姿を通じて、お役に立てるよう、務めさせていただきます」

含みのある挨拶を済ませた勇樹が、礼儀正しく一礼をした。

その様子だけならば、礼儀正しい好青年に見えるのにな、と亨は心の中で感心した。

勇樹にとって、今回のスケベゲームは、太根大学サッカー部の団結を取り戻すためだけでなく、勇樹自身の性癖を満たすためでもあることを、亨と健斗は承知している。

礼儀正しく、卒のない人付き合いをする勇樹の性癖が、まさか、「男らしい男が羞恥や苦悶する姿」だと見抜くことは、かなり難しいのではないかと、亨は思っている。

旧太平大学と旧根岸大学の派閥の溝が深かった時期も、偏ることなくマネージャーとして務めていたことも踏まえると、己の言動が他人に与える印象のコントロールが上手なのだろう。

「では、今回のスケベゲームについて、説明いたします」

勇樹の言葉に、サッカー部員たちが黙り込んだ。

その目に期待が輝き始めていることから、勇樹の言葉を聞き逃すまいとしているのだ。

「今回のスケベゲームの目的は、部長と副部長という責任ある立場にありながら、我々サッカー部の求心力の要と成りえなかった健斗部長と亨副部長への試練となります。

ゲームの目的は、サッカー部の範として、チームメイトへの信頼を示せるかどうか。

この目的に沿えなかった場合、罰ゲームを受ける、という形式となります」

勇樹の説明に、亨は辛辣だな、と感じ、ここまで言い切った勇樹に対し、サッカー部員たちが反発をしないかが気になった。

サッカー部員たちの様子を見回すと、亨と健斗に対し手厳しい物言いをした勇樹に向けて不満を隠さない部員を見つけた。

直秀だ。

亨は、直秀の顔を見つめる。

直秀は何か言いたいことがあるような、それでいて、何も言わずに済ませたいというよう

な、迷いがあるように亨には思えた。

勇樹に向けている不満も、嫉妬や敵意ではなく、何かを指摘したがっているようだ。

何年も指導をしてきた直秀の迷いを抱えた様子を見て、亨は何があったのかを尋ねたくなった。

けれど亨は、直秀への思いを押しとどめ、その場に留まった。

これから亨は、健斗とともに、スケベゲームを通じて太根大学サッカー部の皆に範を示さなければならない。

先輩後輩として、直秀への声掛けは、そのあとだ。

「では、互いへの信頼関係を示すための第一ゲームを始めましょう。

健斗部長、亨副部長、全裸になってください」

「分かった」

「了解」

勇樹の指示に、亨と健斗は頷いた。

そして、亨と健斗はユニフォームを脱ぎ始めた。

全裸になった亨は、恥ずかしさで身震いをした。

大柄な体躯と瞬発力を備えた亨は、ゴールキーパーとして優れた身体的素養を備えている。

全裸になろうとも、無様さではなく、見事な体格による雄々しさを、見る者は感じることだろう。

けれど亨は、己の裸体を晒すことを、とても恥ずかしく思う。

その原因は、亨の平凡チンポだ。

数値の上では亨のチンポは、平常時、勃起時ともに平均的なサイズであり、決して短小粗チンではない。

また、亀頭もずる剥けであるため、チンポの見た目に欠点らしい欠点はない。

ただ、亨の体格が大柄であることが問題なのだ。

亨の体格が大柄であるため、相対的に亨のチンポは小さく見える。

巻き尺での計測や、マッチ箱やコーンスープの缶と並べてみれば、亨の平凡チンポは決して小さくないことを示すことはできる。

逆を言えば、比較対象を用意しない限り、亨のチンポは小さく見えるのだ。

亨は、そのことが恥ずかしくて仕方がない。

隣に立つ健斗の裸体を見て、亨はますます己の平凡チンポを恥ずかしく思う。

浅黒い地肌の健斗は亨に比べれば小柄とはいえ、高身長だ。

ラテン系の顔立ちも、全裸に臆することのない堂々とした様子も、男らしいと亨は思う。

何より、亨はデカチンなのだ。

勃起してもなお皮を被っている仮性包茎とはいえ、健斗は体格に負けることのないデカチンを備えている。

当然、亨の平凡チンポよりも大きい。

亨は、健斗のデカチンが羨ましい。

仮性包茎であることを踏まえても、分かりやすいデカチンが、亨にはとても羨ましい。それに、健斗の器の大きさには敵わないと、亨は感じている。

太根大学サッカー部が抱えている問題について、亨は一人で解決しようとしていた。けれど健斗は、「俺たちのサッカー部だから、俺たちで解決する」と反論した。

少なくとも健斗は、合併前の大学への未練を乗り越え、太根大学サッカー部の一員としての自覚を強く抱いている。

そうした精神性を前に、亨は恥ずかしさが増していくのだ。

「では、第一ゲームである団ケツボール運びの説明をします」

勇樹が、サッカーボールを取り出し、サッカー部員たちに向けて突き出した。

「ルールは簡単です。

健斗部長と亨副部長、お二人のケツでこのサッカーボールを挟みます。

そして、お二人のケツでサッカーボールを保持したまま、ここからミーティングルームの入り口まで向かい、ここまで戻ってきてもらいます。

ね？ 互いの呼吸を合わせれば簡単でしょう？」

勇樹の説明に、サッカー部員たちがにやにやと笑い始めた。

「おいおい、その笑いはもちろん、俺たちの成功を期待してのことだよな」

健斗が両手を頭上で振りながらサッカー部員たちに問いかける。

「がんばってくださいーい」

「ケツで団結示してくださいーい」

サッカー部員の中でも特にノリのよい連中が健斗たちに声援を送っている。

「おう、俺たちのケツを信じろ！」

健斗が陽気に笑い、サッカー部員たちに向けてケツを向け、ピシャリと響く音を立ててケツを叩いた。

「では、次は健斗部長の仕置きゴム 1 回目です。

サイコロを振りたい方！」

亨の心境など関係ないように、勇樹が仕置きゴムによる罰ゲームを進行させていく。その様子を聞きながら、亨は、健斗も同じように無事に済んでほしいと念じた。

「健斗部長の仕置きゴム 1 回目は 6 です」

「へへへ、亨が無事だったんだし、俺も無事なはずだっ！」

健斗は口では余裕を見せているが、声が僅かに震えている。

当たり前だな、と亨は思う。

無事に済む可能性があるとはいえ、怖いものは怖いのだ。

健斗の仕置きゴムを握る亨は、健斗も無事に済んでほしいと念じる。

「では健斗部長、6 歩、進んでください」

「おう、任せろ！」

健斗がいつもの通りの強気な態度で、腕を大きく振りながら 6 歩進んだ。

健斗のケツを見つめる亨は、仕置きゴムの伸び具合に、亨の玉袋が心配になる。

「亨副部長、手を放してください」

「ああ」

勇樹の指示に従い、亨は手を放した。

ヒュッと空気を切りながら仕置きゴムが反動で縮んでいく。

「あ」

亨は小さく声を漏らした。

ゴールキーパーとして、動体視力に優れた亨は目視してしまったのだ。

仕置きゴムが、左右にぶれながらも、健斗の玉袋に向かって戻ってしまうのを。

ぶれろ！　ぶれろ！

亨は、無駄だと理解しながらも同じ男として、健斗の金玉のために念じる。

けれど、仕置きゴムはまっすぐ、健斗の玉袋に向かって縮み戻る。

「ギャン！」

健斗が犬のような濁った声で叫び、衝撃によろめきながら前に進んだ。

亨は、健斗の膝裏がガタガタと震え、全身を震わせながらしゃがみ込む様子を見守るしかない。

しゃがみこんだ健斗が大きく肩を震わせた。

「いってええええよおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

健斗の叫び声が、クラブハウスに響いた。

「うっわー、悲惨じゃん」

「まっすぐ玉袋に直帰しやがったな、このゴム」

「健斗部長、運がないなあ」

サッカー部員たちが、健斗の叫びに同情しながらも笑みを浮かべている。

サッカー部員たちの性根が曲がっているのではない。

サッカー部員たちにとって、この罰ゲームは亨と健斗が自ら望んだ結果なのだ。

自ら望んだ結果を雄々しく、男らしく、正々堂々と受け入れることは、サッカー部員たちにとって当然のことであり、健斗の決意を穢さぬためには、健斗の醜態と不運を笑い飛ばすべきなのだ。

「ちっくしょおおおお、俺のケツが薄いばっかりに！」

立ち上がった健斗は軽く飛びながら、嘆いている。

玉責めの痛みを知る亨は、健斗の嘆きに同情する。

「薄いのはケツだけでしょうか」

「勇樹ってば、バラエティ番組並みに辛辣じゃん」

勇樹の寸評と、それに対するサッカー部員の眩きを聞いた亨は、バラエティ番組は魔境なのだ、と誤解をした。

奥付

サンプル版 『スケベゲーム 男魂継承』

初出一覧

第1話：2026年05月10日 支援サイト先行公開

第3話：2026年05月25日 支援サイト先行公開

作者：金目

金目の同人活動一覧

【pixiv】

<https://www.pixiv.net/member.php?id=22137005>

【DLsite がるまに 金目堂サークルページ】

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=/maker_id/RG01002299.html

【Ci-en 金目堂】

<https://ci-en.dlsite.com/creator/34371>

【金目堂活動報告】 個人ブログ

<https://kinmedo-diary.sblo.jp/>

支援サイトを利用されていない方向けの案内と不定期の雑記に用いています。

【ゲイ小説進捗状況呟きアカウント】

https://twitter.com/chigaya_deep

同人誌や支援サイトの更新告知に用いています。